歴史ポートフォリオ　第3学年

第７章　現代の日本と世界 　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　3年4組29番 東久保悠空人

１節　日本の民主化と冷戦

|  |
| --- |
| 【学習課題】  「戦後の日本は、どのような国を目ざし、国際社会に復帰したのだろう。」 |

①　敗戦からの再出発　▷日本占領と国民生活

|  |
| --- |
| 【めあて】連合国軍の占領政策をとらえる |
| 【わかったこと】  戦後、GHQによる日本占領は「間接統治」という形で行われた。GHQは、「非軍事化」と「民主化」に重きを置き、男女普通選挙の実施、治安維持法の廃止、昭和天皇による「人間宣言」などを行った。また、戦争犯罪に関わった軍国主義者らの公職追放や極東軍事裁判、軍隊の解散なども行った。その頃の国民は、統制からは解放されたものの、食料・物資が不足しており、闇市へと買い出しに出かけるのも珍しくなかった。  【感想（学習課題につながること）】  映画「この世界の片隅に」では、戦後、闇市で「残飯シチュー」を食べる主人公が描かれている。この残飯シチューとはその名の通り、とにかく残飯をかき集め、それを長時間、煮詰めたもので、人によって、評価が分かれる味だったという。映画の中で、残飯シチューは、平和が来たことを暗示させるような役割を持っていた。実際はどうだったのだろうか。今となってはわからないのだが、食事一つとっても、戦後すぐの困難が伝わってきた。銃後の人々にとっては、戦後こそが、本当の戦いだったのではないだろうか。もっと知りたいと思った。 |

　②　平和国家を目ざして　▷日本国憲法の公布と諸改革

|  |
| --- |
| 【めあて】日本国憲法が目ざした社会をとらえる |
| 【わかったこと】  GHQによって草案が作られた「日本国憲法」は、４６年１１月３日に公布され、４７年５月３日に施行された。新憲法には「国民主権」「基本的人権の尊重」「平和主義」が掲げられた。天皇は、日本国および国民統合の「象徴」とされた。そのほかにも、地方自治法、教育基本法の制定や、民法の改正、財閥解体や、農地改革などが行われた。  【感想（学習課題につながること）】  財閥解体が行われたにも関わらず、現代でも、企業グループという形で残っているように思う。（水曜会・二木会など）結局のところは、金が集まるところは決まっていて、その金をやり繰りして、経済が回っているということだろうか。日本の９９％の企業は中小企業である、という話を聞いたことがある。しかし、従業員数でみれば、大企業が５０％、約半分を占めるという。それだけ、財閥の力は大きく、現代まで影響を与え続けているということだろう。現代の、企業グループの変遷や、その形態についても、より深く学んでいきたい。 |

　③　冷たい戦争の始まり　▷米ソの対立とアジア・アフリカ

|  |
| --- |
| 【めあて】戦後の国際関係をとらえる |
| 【わかったこと】  ４５年１０月、国際連盟に代わる国際連合が発足した。以前と異なるのは、安全保障理事会が設置されたことである。ここでは、拒否権を持つ常任理事国５か国（米･英・仏・ソ・中）が中心に、話し合われることになった。しかし、やがて、ヨーロッパでの米ソ対立をきっかけとして、冷戦がはじまると、安保理は機能不全に近い状態に陥った。アメリカ側はＮＡＴＯ、ソ連側はＷＰＯが作られ、４か国に占領されていたドイツは、西ドイツと東ドイツに分かれ、かつての首都ベルリンには、東西に分断するベルリンの壁が建てられた。中国では、戦後再び国共内戦がおこり、共産党が勝利。中華人民共和国が成立した一方で、国民党は台湾へと逃れた。朝鮮半島でも、４８年に成立した、韓国と北朝鮮による朝鮮戦争が行われ、米ソの代理戦争となった。戦後、アジア・アフリカの植民地では、独立が叫ばれ、インドネシア、ベトナムなどで独立戦争が起こった。５５年には、アジア＝アフリカ会議が行われ、第三国の存在感が高まった。６０年は、「アフリカの年」と呼ばれるほど、１７という多くの国が独立を果たした。  【感想（学習課題につながること）】  これは歴史の一種の王道パターンだと思うのだが、「悲惨なことから学びを得る→次に生かそうと新たな組織や枠組みを作る→結局はうまくいかず、理念どまりとなる」ということがここでも起きたと思う。（例：三頭政治、核兵器廃絶）理念通りに物事が進めば、とても楽なのだが、そうはならないのが人間の性というものであるのかもしれない。これと同じパターンを、ほかにも探して、うまくいかないときの共通点と、うまくいったときとの相違点を探していこうと思う。 |

　

④　独立の回復　▷国際社会への復帰

|  |
| --- |
| 【めあて】日本の独立回復の過程をとらえる |
| 【わかったこと】  GHQの占領政策の柱であった「民主化」と「非軍事化」は、「経済復興」と「自立」へと転換された。これは、５０年に起きた朝鮮戦争によるものである。日本を共産党への防波堤とするため、公職追放の解除や、レッド・パージ、警察予備隊（のちの保安隊→自衛隊）の新設などを行った。また、米軍の特殊需要によって、日本には、特需景気が訪れた。５１年、サンフランシスコ平和条約や、日米安保条約が結ばれ、さらには５６年、日ソ共同宣言を出し、国際連合へ加盟した。日本が独立を取り戻し、国際社会へ復帰した瞬間だった。５５年には、自民党による５５年体制が作られた。  【感想（学習課題につながること）】  よく資料集などには「あたらしい憲法のはなし」が載っている。新制中学１年生のために作られた社会の教科書で、憲法をわかりやすく、イラスト付きで、解説しているものだ。しかし、この教科書は、５０年には、副読本扱いとなり、５１年には、姿を消したという。教育の中にも、はっきりと、朝鮮戦争、そして、GHQの影響が伺える。これまで、戦争放棄を謳ってきたＧＨＱが、方針転換したとき、当時の中学生はどのように感じたのだろうか。その方針転換に、納得できたのだろうか、調べてみたい。 |

●　１節のまとめ　●（学習課題に対するまとめ）

「戦後の日本は、どのような国をめざし、国際社会に復帰したのだろう。」について、まとめよう。

|  |
| --- |
| 戦後、日本は、戦争の教訓を生かし、戦争を起こさない平和国家を目指した。４７年に施行された日本国憲法では「国民主権」「平和主義」「基本的人権の尊重」を謳い、天皇は「日本国及び国民統合の象徴」とされた。かつて、戦争を主導した戦争犯罪人は、極東軍事裁判で裁かれたり、公職追放されたりした。１９５０年に起きた朝鮮戦争によって、日本は特需景気へと突入し、経済復興を進めた。また、ＧＨＱの方針が転換され、警察予備隊が新設された。５１年に、サンフランシスコ平和条約と日米安全保障条約、５６年に、日ソ共同宣言を結び、様々な国と国交を回復したため、同年末、国連加盟が認められた。終戦から１１年後、日本は、独立（正確には６年後）と国際社会への復帰を果たした。 |

２節　世界の多極化と日本

|  |
| --- |
| 【学習課題】  　「冷戦下の国際社会の中で、日本ではどのような変化があったのだろう。」 |

⑤　自主・独立・平和を求めて　▷1960～70年代の世界

|  |
| --- |
| 【めあて】1960～70年代の世界をとらえる |
| 【わかったこと】  フランスからの独立を求めたインドシナ戦争は、４６年から５４年まで行われ、フランスの撤退という形で終わった。しかし、これに反発したのが、アメリカであり、ベトナムの共産主義化を恐れたアメリカは、ベトナム戦争を起こし、北爆を行った。やがて、戦争が泥沼化すると、枯葉剤を使用するようになり、世界中からの反戦運動を巻き起こした。７３年、アメリカは撤退し、７６年には、南北が統一され、ベトナム社会主義共和国として舵を取ることとなった。  また、ヨーロッパ諸国による「ヨーロッパ共同体（ＥＣ）」や、東南アジア諸国による「東南アジア諸国連合（ＡＳＥＡＮ）」が設立され、地域統合の流れがつくられた。しかし、６８年、東欧の自由化の動きをソ連が弾圧した「プラハの春」が起きたり、７３年に始まった第四次中東戦争とそれによる石油危機によって、世界情勢は混迷を極めた。６０年代から７０年代は、米ソの限界と、第三国の台頭が見られた時代だった。  【感想（学習課題につながること）】  ベトナム戦争時、ベトナムから帰還したアメリカ兵の多くが、PTSD（心的外傷後ストレス障害）を患っていたという。この戦争を通して、初めてPTSDが社会問題化し、研究が進むようになった。現在行われている、ウクライナ戦争でも、PTSDの問題は大きいという。BBCによれば、ウクライナ兵士の精神状態が回復するまでには実に２０年の期間を要するとしている（2023年時点）。とするならば、ベトナム戦争以前にも、PTSDに近い症状を発症する兵士はいたと考えられる。第一次世界大戦や、第二次世界大戦、朝鮮戦争、中東戦争時のPTSDはどのような状況だったのか、詳しく調べたいと思った。 |

⑥　国際関係の変化　▷安保改定と国交正常化

|  |
| --- |
| 【めあて】安保改定と韓国・中国との国交正常化をとらえる |
| 【わかったこと】  　６０年、日米安保条約の改定が行われた。岸首相によって行われたこの改定は、大規模な反対運動の末、参議院を通さずに、自然成立した。その後、岸内閣は総辞職した。６５年には、日韓基本条約を締結、国交の樹立や経済協力が行われた。７１年、中華人民共和国が国連安保理の常任理事国になり、台湾は脱退した。その翌年、ニクソン大統領の訪中に合わせて、日中共同声明を発表。国交の樹立と台湾との断交を宣言した。７８年には、日中平和友好条約が結ばれた。アメリカの統治下におかれた奄美列島、小笠原諸島、沖縄は、それぞれ５３年、６８年、７２年に返還された。しかし、現在でも、日本にある米軍基地の７割が沖縄に集中しており、問題となっている。  【感想（学習課題につながること）】  安保改定の際、唐牛健太郎という青年が、全学連委員長として活動したという話を聞いたことがある。彼が率いた全学連は、羽田空港ロビーを占拠したり、国会前でデモを起こしたりして、安保改定に反対した。やがて、その波は、全国に広がっていったという。安保改定はそれほどまでに日本に大きな影響を与えたことがわかる。安保条約自体は、現在では１０年ごとに自動更新されることになっている。今一度、安保条約について、考えなければならないと思った。 |

⑦　高度経済成長の光とかげ　▷豊かな国民生活と公害

|  |
| --- |
| 【めあて】高度経済成長の影響をとらえる |
| 【わかったこと】  ５５年から始まった高度経済成長によって、国民の生活は飛躍的に改善された。大量生産・大量消費の時代へと突入し、家電製品や自動車などの総称である「三種の神器」が登場した。６０年に池田首相によって始まった所得倍増計画は、技術革新・重化学工業の発達で実現された。６４年には、東京オリンピック、７０年には大阪万博が開かれ、ＧＮＰは、世界第２位へと躍り出た。しかし、華やかな発展の裏には、公害や川・海・大気の汚染が起こっていた。政府は６７年、公害対策法を制定し、７０年には、環境庁（のちの環境省）を設置し、対策に当たった。７０年代に入ると、石油危機によって、自動車・精密機械へと産業構造が変化した。８０年代には、日米の貿易摩擦が悪化し、日本にとって苦しい時代が続いた。  【感想（学習課題につながること）】  先日、NHKの特集で、カネミ油症について取り上げていた番組を見た（事件の涙・“毒の油”は世代を超えて〜食品公害・カネミ油症事件〜）。高級白絞油に猛毒であるダイオキシンが混入し、健康被害が相次いだ事件である。  4大公害病は、現代では比較的有名で、その補償も行われていると聞くが、その一方で、カネミ油症事件を始めとしたそのほかの公害については、満足な補償が行われていないという。果たして、どこに、その線引きがあったのだろうか。カネミ油症は、その油を摂取した一世代で終わるものではなく、現在、三代目まで被害が確認されているという。公害が決して、遠い出来事ではなく、今なお続いている問題であることを再認識させられた。 |

⑧　わが家にテレビがやってきた　▷マスメディアの発達と戦後の文化

|  |
| --- |
| 【めあて】戦後から高度経済成長期までの文化の特色をとらえる |
| 【わかったこと】  ＧＨＱによって、言論の自由化がすすめられたことで、新聞や書籍などの出版が盛んになった。  ハリウッド映画やジャズ、リンゴの唄や美空ひばりが流行した。世界でも、湯川秀樹や黒澤明らの活躍が取り上げられた。また、５３年にはテレビ放送が始まり、国民の中には中流意識が醸成された。漫画やアニメも人気になり、手塚治虫や藤子・Ｆ・不二雄を中心として、世界へと輸出されていった。しかし、その経済発展の一方で、多くの遺跡が失われることもあった。４９年、法隆寺全堂の壁画が焼損したことをきっかけに、５０年には文化財保護法が制定された。  【感想（学習課題につながること）】  「B層」という言葉を聞いたことがある。これは、小泉首相が、郵政改革の時に、「具体的な内容まではわからないものの、小泉首相のことを支持する層」を表現したものとされる。この、B層の登場に一役買ったのが、この頃出てきたラジオやテレビではないだろうか。現代では、その役割はYouTubeを始めとしたSNSに受け継がれている。自分は、周りに流されるのでなく、自分自身でしっかりと意見を持って、政治に参加していきたいと思った。 |

●　２節のまとめ　●（学習課題に対するまとめ）

「冷戦下の国際社会の中で、日本ではどのような変化があったのだろう。」について、まとめよう。

|  |
| --- |
| 冷戦の中で、これまで、民主化・非軍事化に重点を置いていたGHQの占領政策は、経済復興・自立へと転換した。５０年に起きた朝鮮戦争の影響で、自衛隊が設置され、５１年に結ばれた日米安保条約で、米軍駐留を認めるようになった。５５年からは、高度経済成長が始まり、「もはや戦後ではない」時代へと突入していった。経済は大きく発展し、大量生産・大量消費の時代になる一方で、公害が発生するなど、影の側面もあった。また、サンフランシスコ平和条約、日韓基本条約、日中平和友好条約、日ソ共同宣言など、第二次世界大戦で戦った国々との和平を結び、５６年末には、国際連合へ加盟し、国際社会に復帰した。冷戦下の国際社会において、日本は、共産主義への防波堤として、その役割を遂行していった。 |

３節　冷戦の終結とこれからの日本

|  |
| --- |
| 【学習課題】  　「冷戦後、変化する国際社会の中で、日本ではどのような動きがあったのだろう。」 |

　⑨　民主化のうねりと国際社会の変化　▷冷戦終結後の世界

|  |
| --- |
| 【めあて】冷戦終結後の世界をとらえる |
| 【わかったこと】  冷戦は1989年のマルタでの会談を持って終結した。その2年後に、ソ連は崩壊した。ソ連崩壊後、ロシア連邦と14の共和国が独立したが、現在でもその領土を巡って、戦争が行われている。ソ連崩壊後のアメリカは、湾岸戦争などの戦争に積極的に介入した。しかしそれは、中東諸国からの反発を招き、同時多発テロを引き起こした。その後、アメリカはイラク戦争を起こし、多くの難民を生み出した。2010年代にはアラブに民主化の波がやってきたが、民主化は達成されず、内戦を引き起こす結果に終わった（アラブの春）。2023年にはパレスチナとイスラエルの戦争が起こるなど、現在も、民族紛争が絶えない地域である。ソ連崩壊後、唯一の超大国となったアメリカは、その奢りによって、悲劇を引き起こすことになった。  【感想（学習課題につながること）】  今回の授業で、物事は、二分できないことがわかった。歴史はそう簡単なものではなく、様々な側面から捉えることが必要だと感じた。情報化・グローバル化が進んだ現代においても、私たちはどちらか一方に都合の良い情報しか得ていないように思う。どちらか一方を悪と決めつけるのでなく、幅広い視野で、真実をありのままに捉えていきたい。  現在のロシアの中高生たちは冷戦終結、そしてソ連崩壊をどのように捉えているのだろうか。一年前には、ロシアの国定教科書が、ウクライナ侵攻を正当化していると、報じられた。だがそれも、西側諸国から見たものであって、ロシアにはロシアの言い分があり、その中に、歴史的な事実があるかもしれない。是非一度、ロシアの教科書を読んで見たいものだ。 |

⑩　泡のように膨らむ経済　▷バブル経済と55年体制の崩壊

|  |
| --- |
| 【めあて】冷戦終結後の日本とアジアをとらえる |
| 【わかったこと】  1985年のプラザ合意を経て、日本はバブル経済へと突入した。バブル経済は日本に空前の好景気をもたらしたが、それは泡のような実態のないものだった。結果的に、バブル経済は崩壊した。一方、アジア諸国（特に中国）は現在でも、発展をし続けている。2000年代以降は、派遣の解禁が進み、派遣切りなどが社会問題化した。国内の格差が広がり続けるきっかけとなった。  【感想（学習課題につながること）】  今を生きている私たちからすれば、それがバブルであることは明白だが、実際にその時代を生きていたのなら、きっと気づけなかったと思う。バブル自体は、何度も繰り返されていることだが、「今の状況がバブルだ」とは思えなかっただろう。  『過去の事例から学び、現在の状況をとらえ、未来を予測する』これこそが、まさに、歴史を学ぶ意義であると思う。バブルは30年周期で訪れるという説もある。30年は過ぎたが、これからも、バブルは定期的にやってくるだろう。その時に「これはバブルだ」と気付けるよう、歴史の勉強をさらに意欲的にしていきたい。  （This time is different と思わないよう） |

　⑪　私たちの生きる時代へ　▷21世紀の日本

|  |
| --- |
| 【めあて】現代がどのような変化の中にあるのかをとらえる |
| 【わかったこと】  2008年、アメリカの住宅バブルは弾け、リーマンブラザーズの破綻から世界金融危機が起こった。09年には、その影響もあり、自民党から民主党に政権が交代した。しかし、普天間基地問題や東日本大震災の対応などで大きな批判を受け、12年、再び自公連立政権が誕生した。1995年の阪神淡路大震災や11年の東日本大震災など、現代でも自然災害は相次いでおり、復興と災害対策が求められている。また、インターネットの発展により、グローバル化が進んでいる。日本の漫画、アニメなどの文化も世界へと広がっている。  【感想（学習課題につながること）】  物心ついた頃から「総理といえば安倍さん、与党といえば自民党」で、かつては、自民党以外の政党が政権を持っていた、という事実が新鮮に感じられた。現在、自民党の総裁選挙や、立憲民主党の代表選挙が行われており、来年には、参議院選挙が控えている。裏金問題、パーティー券問題などで揺れる今、再びの政権交代が叫ばれているが、2011年までの状況を踏まえると、慎重になった方がいいと思った。今の与党がダメだから、野党を推すのではなく、しっかりとその政党の考え方や政策に共感した上で、投票することが、私たちに求められていると思う。 |

　⑫　未来をひらくために　▷世界の中の市民の一人として

|  |
| --- |
| 【めあて】誰もが暮らしやすい社会を築くためにできることを考える |
| 【わかったこと】  情報化によって世界はますます一体化（グローバル化）している。日本は、少子高齢化、在日外国人の増加などの課題を抱えている。誰もが暮らしやすい社会を築くためには、人権の擁護、民主主義の確立、環境問題への世界規模での対処、平和主義の推進、防災・減災の取り組みなどが大切である。  【感想（学習課題につながること）】  歴史が、私たちの生きる現代とつながっていることがよく分かった。また、私たちも、その長い歴史の中の一部に過ぎないことも分かった。これまで、私は、歴史を、共時態的にとらえていたがそうではなく、通時態的にとらえることも必要であることが分かった。これから、高校に入学した後も、歴史の勉強は続いていく。中学校で習ったことを活かして、自分の身近に引き寄せて、より楽しく、面白く、歴史を学んでいきたい。 |

●　３節のまとめ　●（学習課題に対するまとめ）

「冷戦後、変化する国際社会の中で、日本ではどのような動きがあったのだろう。」について、まとめよう。

|  |
| --- |
| 冷戦の崩壊後、日本に求められていた、共産主義への防波堤という役割がなくなり、日本は新たな時代へと突入した。ソ連崩壊の起きた９１年には、バブル経済が崩壊し、失われた３０年とのちに呼ばれることになる長い経済停滞の時代がやってきた。また、戦後から続いていた自民党による５５年体制が汚職事件によって崩壊し、自・共以外の政党による連立政権が作られた。２００９年には、再度、政権交代が行われ、民主党による政治が行われた。現代の日本では、平和主義の推進、環境問題への協力や、少子高齢化への対策、在日外国人の増加、阪神淡路大震災・東日本大震災など、自然災害への対策など、様々な問題がある。その一つ一つに対して、私たち国民が、選挙を通して、政治にかかわっていき、考えてくことが大切である。 |

★　第８章のまとめ　★

　　第８章の学習課題「戦後から現在まで、日本の社会がどのように変化したのか」

（戦後とは何か）について、学んだことを中心に、まとめてみよう。【思考】

|  |
| --- |
| 戦後、「非軍事化・民主化」から「経済復興・自立」へと方針を転換した日本は、ＧＮＰ世界第２位になるまでの超大国へとのし上がった。重化学工業・自動車産業・精密機械産業などが発達し、国民の生活は豊かになった。その中で、「科学の発展こそが私たちの幸福を作る」という価値観が生まれた。しかし、その一方で、公害問題や日米安保問題、核の傘問題など、様々な負の側面もつくってきた。また、バブル経済によって作られた大きなひずみは、その後の長い経済停滞の時代をもたらした。冷戦の時代の中で、日本は、共産主義への防波堤としてその役割を果たし、ある種、冷戦に加担した。戦後つくられた、新たな日本は、ゆがみを持ち合わせていたといえる。現在を生きる私たちは、少子高齢化や産業の空洞化として表れている「ゆがみ」に対して、一つ一つ、問題を解決していかなければならない。 |
| 「戦後」とは、第二次世界大戦への反省と、冷戦の中の経済成長、そして、その成長がもたらした大きなゆがみを払う時代であると思う。「戦後」がどこまで続くのかはわからない。しかし、戦後８０年を迎えようとしている私たちの中に、確実に、「戦後」が終わったような意識があるのも、また事実だ。「新しい戦後」とも形容されるように、私たちは今一度、戦争を単なる悲劇や、暗記すべき歴史の事項としてみるのではなく、その「ありのままの姿」をとらえる必要があると思う。 |